

富山藩の売薬業統制(上)

植村元覚

第一節 序

領主的貨幣經濟が独占的に市場を制覇した封建經濟における農民的商品市場の展開は、国内市場への連携過程で城下町商業とは著しく対立したことは最近の研究によつて漸く明らかにされつつある。ことにそれは農村商業が先進地帯では、明和、安永を経て着実な進展を示して城下町外の農民的商品市場を展開し例えば中津藩では天明期には「在中之者御城下江直々持参り候品も高直成品斗持参下直或品は在中店々に買取買々同様」となり油、たばこ、材木類も御門外にて売捌き城下町への搬入は減少する状態となり、和薬も「和薬種類是又御門外店へ相調候に付只今に而は御城下薬種商売之者一円致得不由其子細は其所々江前銀等相渡置候而持出候種類不殘引受上方表へ差送候付御城江入江一向無御座候」という状態で、都市商業を繁榮させていた商品の多くが農民的商品市場において売買されるようになりむしろ都市の發展は期待できない程であつた。領主的商品流通圏に攪乱作用が捲き起される迄には至らない領域經濟における商業統制について、その地域的品目的制が解放されない場合予め商品目的をもつて生産された増大せる商品の量目制限を解放する試みは、少量の商品を頻繁に搬入することがその一因であると考えられ、その結果はこの種の商品搬入に専従する商人の發生を導くことにある。売薬商人の行商進出の可能性はここに見出された。このような農民的商品市場の展開と城下町商品經濟の存立において即ち農村における購買力の蓄藏と都市における市場の獲得によつて富山売薬行商の成立は基礎づけられていた。慶応三年熊本藩行の富山売薬商人の場所先及び人名簿をのせた「御達写并

植村・富山藩の売薬統制

諸控帳第一一三―六丁」によれば、その行商人の脚数は三〇であつた。このうち城下町のみを行商先場所とする者は二名、城下町とその周辺のそれは五人であつて、その他の二十三名はこの近在の町や農村地区であつた。同じ傾向は大名領地でないところにおいても貫徹していた。大阪近辺に行商する富山の阿部弥一郎の行商地域は、同氏の「永代簿」に記された文久三年の夏廻三十日と秋廻八十九日の総行商日数一一九日のうち、大阪町、平野町は計十七日で、淀在、松厚在、伊丹在などが計一〇二日であつた。このように売薬商人は町方と更にその近在の農村地区において行商するものであつた。定住商人と違つて行商地域を有利性と安易性を求めて選択することができるのであり、ギルド的、封建的規制をもつ城下町地域と共に、更にはその弱い周辺部の田舎町を含めて農村地域に比重が傾斜していた。けれども農村地区であっても等しく、領域經濟として独立の封建的權力の支配地域であり、富山売薬商人が營業を行い売上金を清算する場合にはこの領域の權力構造との関連において始めて免許されるのであり、領域内国産との競争、正貨の流出の問題は經營的にも政治的にも甚だ重大であつた。

売薬を国産の第一として奨励する富山藩においては右のような幕末期の領域的商品流通關係は見逃しえない課題であつた。領主的貨幣經濟は全國經濟の段階と称せられるこの期における領域を意識しながら、藩權力による国産の奨励を通じて売薬業対策を樹立したものであつた。

即ち領域經濟の枠を越えて、富山平野から全国的に行商する売薬業に対しての富山藩の基本的政策は、天明三年または文政二年の富山町奏行より反魂丹方上縮への次の達のなかによく示されている。

(2)

「御当地反魂丹藥方之儀は御国之名産に而、諸国江売弘大勢之渡世に相成大切成品に付、余商売に勝り前々より縮方厳重に申渡、人々交易之為に宜品に而全相心得可申……」

この史料は富山県立図書館所蔵「反魂丹に関する諸事留書」に「卯年四月」とあるのみでその年代については「越中史料」富山市史及び「富山売薬紀要」は天明三年とするが、史料集では文政二年と推定している。ここでは、この年代の決定を試みることに関心があるのではなく、藩の国産としての売薬業のありかたに対する方針を具現するものと理解されるこの語句の内容に関するものである。もともとこの種の国産に対する藩の政策は仲間組合を通じての商業統制がその最も主なるものであった。商人の仲間組合は、衆知のように同種の商業に従事する商人が自らの営業を擁護せんがために結成した自然的形成物である。富山売薬業は仲間組合を通じて行商圏を形成し、この圏内における行商販売にその中枢があるとともに、そのための準備行程である仕入並びに製造は富山藩において為され、そして行商圏における売上金は藩内に持ち帰られるものであるが故に、その営業は収益の中心の場をなす行商地域即ち旅先藩の支配する領域経済と、国元の富山藩との二つの封建的権力の諸関連において行われるものであった。この売薬業の営業推進の集団である仲間組合は冥加金、御役金を等しく双方の藩に納めて免許を与えられるものであった。富山藩の立場からは正貨を流入するので国産として重要産業であり保護を与えるものであり、また旅先藩からも援助を与えられることもあった。例えば嘉永二年薩摩組仲間より鹿児島木村宛の書状に「御尊公様御世話被成下候分式百金……仲間共江引請儘に拝借仕候……依而当年より返上金并利金等の始末仲間共より相納可申候」とあり藩主より貳百両融資されたりした。しかし行商地域に当る領域経済の立場からはその営業は正貨流出を来たすものであると云うことを理由に必ずしも保護せられないのであった。旅先領内または他藩からくる業者との営業上の競争のほかに、更には封建勢力の圧迫を受け、時には指留になることも屢々であった。営業の免許継続を冥加金、御役金の上納によつて認めながらも、国産或いは正貨流出とい

う見地からは各藩の対富山売薬業政策はこのようにしてむしろ消極的排除的傾向を示すものであった。

本章ではこのような諸藩の態度を前提にしながら、富山藩のこの売薬商人に対する政策、とくに仲間組合を通じての商業統制を中心にして、公的権力の立場から経済的統制の政策をいかに推進したかについて考察せんとするものである。近世封建経済の一般的傾向としてははじめは藩においては仲間組合を否認する態度もあつたが、後にはむしろこれを利用して、支配地域の産業を助長し繁榮せしめ、これにより莫大な冥加金を課徴することにより財政窮乏を弥縫する一つの手段とすることができた。けれども旅先藩ではこの課徴による利益よりも、領内の国産の奨励、従つて正貨の流出防止が藩の政策として採りあげられ、かくて富山藩の対売薬業政策は産業の助長繁榮のためそして冥加金の課徴のため、それは畢竟財政経済の独立維持従つて公権的権力の安定を目的とするものであるが、このために他藩の藩経済における利害の逆行関係に対処して商業に対する封建権力的統制即ち営業の領域内及び領域外の活動を規制し、封建勢力の強化を計る一の制御取締策がその中に秘められるものとなることは当然のことであつた。国産としての産業の振興という保護政策はかくてまた統制強化策を必然的に裏付けし、その前提条件をなすものであった。それは藩の立場より物資の需給を調整し、配給組織を整備し、価格を調節して経済を安定、発展せしめつつ財政収入を補わんとするものであった。

富山売薬商人の形成する行商圏は、全国各地方の封建的領域にまたがる商品流通であるが故に、領域経済の利害関係を通じて理解されると共にそれは全国経済の概念における封建経済のありかたを浮彫するものであった。このような領域対領域についての経済意識の問題は、実はヨーロッパ経済史において封建末期の著しい現象をなすものであった。アンリ・ピレンヌは、領内保護の徴候は十五世紀に至つて始めて現われたものであり、それ以前では各国とも商業活動に対して統制を加えようとしなかつたと述べる¹²。その研究態度は、幕末段階の領域経済を¹³考える上に甚だ暗示的であるようである。

1、篠藤光行「農民的商品市場の成立過程」(経済学研究、昭和三十一年三月号)及び同氏引用の経済資料四による。

2、富山売薬業史料集九三九頁

3、" 二九六—七頁

4、" 一五七頁

5、越中史料、卷三、一五六頁

6、富山市史、第二編附録、五九頁

7、富山売薬紀要、三四頁

8、史料集、一五八頁

9、堀江保蔵博士・近世日本の経済政

策、特に第三章

10、史料集、六五二頁

11、宮本又次博士・続日本近世問屋制の研究、七三頁

12、アンリ・ピレンヌ・中世ヨーロッパ経済史、増田四郎外訳(昭和三十一年

)、一一三頁

13、この点については宮本又次博士編「藩社会の研究」(近刊予定)における拙稿「幕末領域経済の封鎖性と解放性——旅先諸藩における富山売薬人行商の対策——を参照

第二節 原料薬種の配給統制

行商人が行商圏を構成する拠りどころとなる基本的な財は、富山売薬商人においては富山に行商から帰着して原料薬卸問屋より仕入れた薬種に加工生産した売薬と云う特定の商品である。行商人が製造加工し包装せんとする薬種の品質、性状、規格及び価格についての選定は、その配置販売する売薬営業には注意すべき第一の過程であつた。薬種の配給過程に対する藩の統制は従つてこの重要部門にむけられ行商人の原料薬の買入に対して集中的に行われるものであつた。その統制の展開は次の四期に分けて考えることができる。それは史料の整う宝暦以後の江戸時代についての売薬業の発展史において夫々、宝暦、天明、文化及び嘉永の頃の四期わけて考えられるようである。売薬業は江戸時代中期以後の全国経済の進展に応じて成立、成長したのであり、行商人の需要する薬種も種類、数量において増加し、また仕入方法も旅先から相接買入れたりに対応して藩の統制策もまた変化したものであつた。

薬種の配給統制はその始めにおいては、藩権力自体の主体性において行われたと云うよりはむしろ薬種業者の自主的統制の色彩において行われた。藩

では薬種屋の中から仲買を選定してこれに薬種吟味と配給統制を委任するものであつた。次にはこの統制を拡大強化するように薬種仲買の配給過程の明確化が進められ、更には一転して藩直営の薬種会所の設立によつて、これを領主経済において掌握し、薬種の配給過程はここを経由するという方向に進展した。

第一期 仲買の統制

はじめ売薬行商人は富山の薬種屋製造の売薬を行商販売した。その旅先行商が持続的に行われるにつれて原料薬は多少とも旅先から行商の帰路に買い求めて来たものであるが、その発展するにつれて社会的分業としての原料薬を専門的に遠隔地から買集め、一部は自ら製造すると共にまた一部は行商人に卸売する遠隔地商業としての薬種屋仲買が富山に生じて来、この機關を通じて買入れるものとなつた。売薬業史料としては数少しい初期のものであるが、宝暦二年、富山町奉行より当番町年寄への達は次のようにこの過程において統制し、

当春申渡置候薬物之義今後紛敷品之由相聞候、依之先日以來薬種屋共江及詮義候所、今般薬種屋共より仲買兩人相立紛敷品遂吟味度旨相願候、就右願之通仲買兩人申付候

一、旅方より薬物金持参於当所致商売度もの之候は、其宿元より仲買人一番町本多七郎并荒川六郎右衛門兩人之内へ及按内、中買人之内商人令同道為致可申候、

一、当所之もの於他国和薬杯買入、当処ニ而相弘度候は、仲買兩人之内江指出売出し可申候

一、薬種屋之外薬物類不致売買様当春申渡置候所今以密ニ令売買候もの之由相聞候、以來左様之品於在之ハ商売人共急度越度可申付候、尤薬種屋とも并中買兩人より見付次第断答に候条、別而反魂丹売江入急可申付候、以上

三月 廿四日

当番 町 年 寄 中

町 奉 行 所

(4)

即ち富山町奉行から薬種屋に薬種吟味の方法について詮議した結果、薬種屋より二人の仲買人が当ることに決定され、外来の薬種業者は富山ではこの仲買機関を通じて行うこと、また富山の者が当地で薬種を販売する場合も同様にこの機関を通ずること、そして薬種屋の外はその売買は許されないこと、行商人に違反者があれば仲買、薬種屋より告発すること等が規定された。

第二期 その整備——領域内及び領域外統制

右の配給統制が一層整備、拡充された段階であつて、それは天明の頃に富山町奉行より当番町年寄への達によりみられる方法で進展した。既に明和頃から漸く売薬は活躍期に入り取引の活潑化に対応するものであつた。

一 反魂丹商売人共於場所先金銭之形に薬種受取令持参もの之由、是以後為取受候薬種先による売払少分たり共、御当地へ令持参候儀堅不相成候。

一、諸国より薬種商売もの旅籠町老丁目清蔵方へ定宿に申付申候条、旅籠町、いなり町両町井外町家へ旅方より類家知音等候而若薬種持参候もの之候はば、早速右清蔵方へ可申届候。

一、質屋共には不及申惣而町家之もの薬種引当を以金銀取替申間敷候、締方に差障候儀在之に付申渡候、併薬種屋共より質入候儀勝手次第に候。

一、他所より薬種荷物御当地薬種屋之外へ持参仕間敷旨、京、江戸等□□元締共へ申渡候条、上方通ひ荷入之者共右同様相心得可申候。

一、薬種仲買、締役人共町方へ相廻り、洩薬種相改申届答に候

右之趣町中一統厳重申渡、町丁役人共におゐて御改印形可被受候、已上

六月 廿九日

町 奉 行

当番 町 年 寄 中

右によれば原料薬種の統制は前段階と同じく薬種屋の外はその取扱いが禁止されるのを原則としたが、脱法手段として金銭の形で持参するものがあり、厳守が困難であるので取締方法としては領域内と領域外との地域別について施行された。即ち富山藩内に関するものと、藩外即ち広く拡大しているその全国的行商地域に関連して統制を計るものとの方法が採用された。

(4) 領域内統制……行商人は旅先から薬種を富山に持運ばざること。外来の薬種商人の宿泊場所の制定と吟味、また薬種の質入及び薬種担保による融資の禁止、但し薬種屋については質入は自由であること。洩薬種については仲買、締役人ともに監督せしめること等である。

(5) 領域外統制……右の薬種の配給統制は富山藩の領域内について規制されるものであるが、行商人の行商地域は外延的に全国に拡つてゐるためにその買入れはいづれの土地からも可能である。このため藩内のみの統制ではその効果を期待することは十分でなく、藩内から必然的に全国的範囲の統制が前提されねばならなかつた。しかし封建社会ではこのような全国的な対策を一小藩の権力によつて施行することは不可能なことであり、それは物資の全国的集散地であり、薬種についても種類、性状、規格等について自由に選択できる上方江戸の荷扱い業者を対象にして打ち立てられ、申し渡されたものであつた。右の史料では京、江戸等の次の二字が不明であるが、後半の文章の内容からして荷入元締について申し込んだものと解せられる。

このほかにとくに地域を限定して藩からその薬種の取扱いを統制した場合がある。例えば薩摩藩では密貿易が盛んであり、また他国人の入国を拒否していたが、富山売薬商人のみは許されて藩内を行商することができた。売薬商人は密貿易品の中の唐薬を買入れたことは当然推察された。これに対する統制がこれであつて、文政九年富山合衆上縮役から薩摩組に嚴重な達が下され同組から御清印形帳を提出せしめた。即ち「於薩州表出口不正之薬種は不及申候、御法度之品、不寄何に少分たり共仲間一統に買取御儀は堅不相成……去る巳年長崎表同役場より御疑有之無証跡之義被申懸莫大之銀子仲間一統出銀仕候……。」とされた。

第三期 薬種業の株きめ

文化五年に至つて薬種業者について株きめが為された。これまでの配給統制の対象は薬種そのものであつたが、依然として出口不正の不正の薬品が取扱われ、その効果があがらなかつたのに対しその取扱業者について株決めが

施行された。同年富山勘定所より番町年寄への達には、

藥種之義第一毒藥、龜藥并真偽之差別有之人命に抱り候品故御掟も有之候
 処、近年上方廻り反魂丹商売人とも之内出口不正之藥品取扱候族粗相聞へ
 候、右等之趣は 公××御法度嚴敷御縮方も被仰付置候義に候得ば、若於相
 願者不菓越度に候、依之他所より藥物持參之旅人藥種肝煎とも方、而止宿為
 致吟味候様申渡置候、將又町參屋株五拾八軒、地方生藥刻株七拾五軒新規に
 申付候条、余商売之もの若致心得違都而藥種於致売買は急度手当可申付候、
 此段一統嚴重可被申触候、已上

辰 九月

御 勘 定 所

別紙通申来る条町方一統可被申触候、已上

九月 四日

町 奏 行

当番 町 年 寄 中

とあり、外来の藥物持參之旅人について止宿させて吟味することの外に藥種
 業者自体について徹底を期することが必要であるとして藥種株新設により促
 進せんとすることが規定された。このような整理された方法がとられたこと
 自体は売藥業が活潑化し全国的行商が盛業に向つていることに対応して考慮
 されたものであることが知られるのである。

第四期 藥種会所の成立と廃止

嘉永三年に至つて藥種の配給統制は藩宮の藥種会所において行われること
 になった。即ち

藥種会所御建方に付、藥種方吟味役町肝煎二上屋治郎三郎殿諸組江御触達
 写左之通

今度藥種会所御建方就被 仰付候、都而同所より藥種屋共江御払方に相
 成候は勿論、藥種売商人之義は兼而定法も有之候に付、累年申達置候通り
 藥品之義は真偽之差別も有之殊寄人命にも相拘り候品柄故、嚴重締方申付
 置候次第に而、依而已来大阪之外自他国より売買之藥品も右同所より御買
 上ニ相成候条、猥取扱義堅不相成候
 一、反魂丹売人共諸国へ罷越、右売藥代金之為代り其国より産物之藥品

植村・富山藩の売藥統制

受來り候向有之ものは、駄賃銀并口錢添を以右同所江御買上に相成候。

一、是迄藥種屋之外取扱候義不相成旨先年より度々相違置候所、近年猥に
 他所より買調隨意之扱方有之趣粗相聞以之外難相濟事に候、依而其筋為
 調理方廻り之もの入念申付置候条、此後右体之族於有之は、荷物等取揚嚴
 格手当可申付候条一統可相心得候。

右之趣町中一統不洩様入念可有御申触候 已上

戊二月 廿四日

御 勘 定 所

浅野久左衛門 殿

小塚宇兵衛 殿

ここでは従来のように単に藥種の吟味という品質の問題ではなく、すべて
 藥種会所に買上げそれより藥種屋に払下げになるという領主的貨幣經濟的統
 制が加わることになった。しかも従来屢々禁止されながらも慣習的になつて
 いる買入法である行商人が旅先で売藥代金の代りにという名目で持ち運んで
 きた藥種には運賃その他の手数料を加算して買上げるといふ輸送費負担によ
 る業者の利益を考慮していた。蓋し売藥の原料である藥種の統制を徹底化す
 るためにはすべてのルートを会所に流入せしめることによつてのみ可能であ
 ると結論されたためである。原料が売藥行商人に入手する経路は大きく分け
 て三つあつて、藥種屋を通じての吟味統制によるものと右の行商人の旅先か
 ら持參するものと、この外に外来の藥種屋があり、しかもこれらの藥種は品
 質性状規格が種々であり、単に品質效能のみでなく価格、数量の点でも複雑
 に流通していたからである。この藩宮政策は江戸時代後期においては領主自
 身の商品生産への関与が積極化し、藩有財産である森林払下金や藩營鉱山益
 金また近世後期の特徴的現象である専売益金などにより領主的商品生産の発
 展が計られたが、富山藩の藥種会所もその一つであつた。封建領主は展開し
 てくる商品經濟に対応して売藥を國産として重要視し、前章に述べたように
 間接的であつたが、相當に保護し奨励したのであつた。國産の發展はそれ
 による商人からの冥加運上の増徴を當然に前提するものであつたが、これにも
 限度があり、殊に売藥行商の經營は分散的であり、他藩内で行われることの

ためにその発展にも自藩内の営業と異なり旅先の封建的権力からの制限が伴うのであった。封建領主は財政上の徴収確保と営業利益を確保するには商品経済の機構そのもののなかへ突入することによつて始めて到達されるが、富山における第一の国産である売薬は、全国経済を基盤にする商品流通の機構に立つものであり、領主経済は新しい商業面の支配者層を巧みにとらえることは自らの財政的補強のためにも必要であつた。薬種会所は単にこの売薬業者の成果を収奪するばかりでなく、今やこの過程を通じて原料薬の配給を会所を通してしめることによつて、商品経済の端緒をなさんとするものであつた。商業資本家の発展でなく、その商品生産を藩権力が把握しようとするものであり、領主経済の商品化により商業資本の発展を統制する商品化の対向性がうかがわれるのであつた。

ところが薬種会所は実現して十分にその所期の機能を發揮しないままに崩壊した。同年九月の勘定所の達⁹⁾は次の通りである。

先達而薬種会所建方就被仰付候、都而同所より薬種屋共江御払付に相成候趣等夫々相達置候処、今度御詮義筋有之右会所御指止め被

仰付候、依而薬種屋等自他之薬品買入方等之儀は以前定法之通可相心得候、尤去年より相達置候通薬種屋之外薬品猥に他所より買調随意之扱方無之様急度可相心得候。

右之趣町中一統不洩様可有御申触候、已上

九月 廿六日

御 勘 定 所

浅野久左衛門 殿

小塚宇兵衛 殿

薬種会所の廃止の事情についてはこれを説明する根本的史料は残存していない。けれども、次の史料にあるように薬種会所の廃止により名前連人とも宅両宅歩式朱の増上納を命ぜられた。

文政六年に名前金宅両連人に金三步被仰付、其後嘉永三年八月薬種御会所御指止により名前連人共宅両宅歩式朱に被仰付、過分之御増方に候得共御産物御国恩之事故一統御請仕是迄上納仕来申候。

これは領主的独占利益に抵抗する売薬業者の指止の要求が増大して、そのためにこそ増上納として「御会所御指止により仰付」の形で藩統制を突破したと推察される。三都蒙商層と異なり、圧倒的な多量の資本蓄積のない売薬商人は、資本による商業的制覇ではなく、まず領主権力を利用して自らの営業の安泰を計らんとする行商人が旅先藩で屢々経験した手段と同じ形式以外のものではない。このような方法によつて創立後まもなく廃止されたのは無理からぬものであつた。この理由は、一つにはこの統制の厳守は極めて困難であつたこと、第二に薬種業者や行商人がこれによつて甚だしく害される危険があつた。第三に一層重要なことは、領主取分が廃止を条件にしてより多くの運上銀を確保しながら統制することができた。従来大阪、江戸その他各地から薬種屋が蒐集、買入れてくるほか、また行商人自身も禁制とはいえず必しもこれの厳守は事実上履行されなかつた。領主的商品流通圏に攪乱作用が捲き起れる迄には至らなかつたが、法令や仲間示談を犯しても旅先で安価な時と所に買入れ、また帰国の際は帰りの荷の中にしほせて運ばせ、恰も毛細管作用のように富山に流入したのであり、自由な価値法則の貫徹による商品流通法則が封建権力によつて歪曲された流通即ち領主的貨幣経済の間隙を流れ動いていた。また他国から入りくる薬種業者のものもあつた。これは既に宝暦以後、名古屋では同じ全国的行商人である近江商人が藩の座商や株仲間の特権にも拘らず、市内に宿所を求めてき、或いは直接に仲買に商品を送致することが多かつたのと結果的には類似していた。特権的商業の統一的権力の解体が進行しつつあつた。薬種の吟味のためにはこれら一括統制の必要性は意識されたとしても嚴重な実行は甚だ困難であつた。更に薬種業者は問屋商であつて商業資本を蓄積せる有力な売薬業者であり、これが封建権力によつて営業の重要部分を収奪されることになり、少くとも自らの仕入価格を最も有利にするための商業的才能と資本の運転の立場から云つて、この会所の出現は業者の商品経済を禁止するも同然のものであり、徹底的な打撃をうける仕法であつた。そのために極力その実行を阻止したことが推察せられ、結局、旅先藩でその指留を緩和もしくは撤回せしめるのにしばしば役立

つた方法であるが、上納金の賦課の形によつてこれを解決し、廃止させることになり、事実上問屋商業資本の勝利に帰したものであつた。領主の側からみればそれは商品経済を捕捉してこれを財源化したものであつた。

藩権力が領内に経営の本拠をもつ薬種屋層の果す機能において産業を統制する場合、それはこれを支配下におくことによつて売薬行商という領外の行商圏の発展に寄与し、他領域の営業と市場の競争をめぐる競争に対応しうるためのものでなければならぬ。藩の態度は既述のように藩自らが直接的に保護助勢するというよりはむしろ行商地域に妨害の因子が出現すればそれを外から取り除くという風に方向づけられたものであり、間接的保護政策の内容をもつものであつた。営業を外側から育成する態度であり、営業内部にたち入つて或いは経営そのものについて直接的に積極的合理的処置をもつて臨むという方法で為されるものではなかつた。ひるがえつて商人の側からみれば、江頭博士は封建制下におけるそれを近江商人の商法の事例をあげて、これは「封建権力と余り結びつくことをしなかつた。封建権力を向うに廻すという料簡もなかつたが、また飽くまでその庇護の下で商勢を張ろうという気持もなかつたようである」と性格づけられる。同じ傾向は富山売薬商人の態度についても基本的には外れていないと考えられるが、ただ国産として藩の示す保護や統制には封建的規制とそれへの対応を免れることはできなかつた。右の例の江州日野の豪商中井源左衛門は売薬行商人として遠く関東一円に下り十五年間行商に精勵し後には定着商人となり、太田原、仙台、伏見その他に出店を設け、各種の商品を取扱い問屋業、醸造業、質屋等を経営するに至つた。その後幕末期に至つて、安政の頃、財政窮乏の仙台藩の蔵元役に「不承ながらも御国恩に報いるため」に就いて藩への融資につまづき右の先代に開いた支店を閉鎖した。それは藩から次々に課せられる御用金を免れることがその一つのねらいであり、数少い店を集中的に守るためでもあつた。⁽¹³⁾

実際幕藩財政の窮乏は文化、文政以来その深刻の度を加えてき、藩政の危機を匡救して恩威行われる封建的支配体制を再興せんとした天保の改革も成功せず、株仲間の解放後も武士階級は冥加金がなくなり「公的にはむしろ悲し

植村・富山藩の売薬統制

むべき」こととされ、遂には藩権力は再び業者を制限すると共にその独占を保護することによつて、固定化した運上銀収納を確保していくこととした。⁽¹⁴⁾

富山藩の売薬業者に対する御役金は「反魂丹上納金」によれば、その始まりの弘化元年（千八百三十六丙二歩、永七匁八分二厘上納）から嘉永にかけては大差はなかつたが、薬種会所廃止後は急激に制度的に変化を示し御役金の種別が増加した。即ち廃止直後の嘉永四年には従来の御役金の外にその約四割にあたる「増御役金」を設け、六年には「当座預り」「寛裕講向御内金預り」「遠明汲講向御内用金一人預り」更に臨時の徴収、次年度の借上げや「取替金」などが課せられ、領主経済の財源化が進められたのであつた。

1、拙稿、富山売薬業の発展傾向（経済史研究、昭和十四年五月号）
「九六頁。近江商人で売薬行商するのは日野出身者が多い。」

2、史料集 五九頁

3、同 七〇—七一頁

4、同 一六八頁

5、同 一四一頁

6、同 二二五—二六頁

7、堀江英一博士、明治維新の社会構造 一〇一頁

8、史料集 二二三頁

9、同 三三七頁「明治三年越後組よりの国札借用方の願書」参照

10、名古屋市史、産業篇 五四頁

11、江頭恒治博士、「封建制下の商業資本の在り方」（野村博士還暦記念論文集）封建制と資本制二八六頁

12、菅野和太郎博士「近江商人の研究 三二頁に及ぶ」

17、史料集 一二六八頁

18、史料集 一三六七頁

19、史料集 一四〇九頁

20、史料集 一三九九頁

13、江頭博士、前掲論文 二九七頁

14、宮本又次博士「続日本近世問屋制の研究」五七頁

15、例えば関順也「藩政改革と明治維新」一三二頁以下

16、同出納簿は弘化元年より安政四年に至る富山売薬人より納付した諸役金を示す。これは反魂丹上納に納入され、決算期まで預かるので「預り」と称せられた。（史料集一二六七頁より一五

第三節 生産過程の統制

行商地域における他藩の売薬業との市場をめぐる競争に打ち勝つためには品質の良否が問題であるが、このために国許の領主経済はその利潤を吸収せ

んとする領内産業の統制と共に、その前提としての領外市場たる行商地域の確保を目的とする保護という矛盾的傾向をとりながら生産の統制がなされた。

売薬業の生産は前記のように二つの過程においてなされる。原料薬を大阪、江戸その他から買入れて売薬行商人に卸売りする薬種屋において行うものと、これから仕入れて、旅先行商地域に出向く反魂丹商売人と呼称される行商人において為されるものである。その製造場は大規模であれば作業場でなされるが、小さいものは家屋の一部が当てられた。しかしたとえ家屋の中であつても、居住部面から離れており、いずれの場合もまた製造規模の大小の差はあつても「仕事場」と称せられる一定の作業場で、従つて家の消費的生活部面から分離してなされるのが建て前であつた。それが相当に広い家では問題はないが、零細な行商人の場合ではその家屋も小さいものになり、その生産過程も居宅と分離するものではないこともあつた。後者のような場合家内において生産することは公的権力によつて禁止された。

(4) 安永三年富山町奉行より町年寄宛の達には

一、薬種屋并反魂丹商売人等、於居宅ニ膏薬煉候義堅仕間敷候、縦御郡地借受煉候共、人家を隔可申事……

右申渡之趣共、町中本家并貸家裏屋之者共ニ嚴重ニ可申渡候、若於相背は其人は勿論、丁頭、日行使急度曲事ニ可申付条、其段可申渡候 以上

町 奏 行

人家の日常生活面を隔てた製造所において生産されるべきものとされた。(4) 売薬の生産は、その生産が増加すると共にさらに次第に藩権力の統制下に組み込まれていった。売薬生産の諸過程は原料及び製品の種類によつては夫々に異なる設備を必要とする。天保頃に至つてこの生産過程の特殊な調合製造については勘定所においてその場所を規定して特定地においてのみ許可しここで集中的生産が規制された。「八番御触留」の天保七年の条には

町方反魂丹商売方取扱候高月薬は不及申、油製并薬種炒釜煎物等之類、先年定之通清水定於煉場ニ製將可致筈之処、近年猥ニ相成右場所へ相向不

申、家毎ニおゐて人々令製法候義も相聞へ、第一火之用心御縮方にも指障り候条、此段承知有之町方一統江可被申渡候、

一、右商売人共製薬等に相用候薬品之儀、薬種炒種之分、右株持之もの共より買求可申所其儀無之、無株之もの共におゐて随意に取扱候族も粗相聞候条、前々之通右株持之もの共より買入候様可被申渡候、若心得違右様之人々取扱せしめ候もの、品物取上ケ急度手当申付候条、是又嚴重可被申渡候、右等之趣申達候、以上

二月 四日

御 勘 定 所

湯口伊兵衛 殿
増山 音磨 殿

このような生産過程の場所的規則は、その過程が原料薬、加工の部門であり、いずれも燃料を使用するが故に達しのように「火の用心」のためでもあつた。しかしこの膏薬の煉り、炒釜、煎し物、油薬などの為される過程は原料薬調合過程において新生産物の品質確保の上に最も重要な効果をもつ過程をなすのであり、配置される売薬品の効能の良否は、原料薬の品質にもよるために無株の者から買入れるのを当然に禁じたが、これと共にこの過程の調合具合の如何という生産技術上の重要契機をなすものであつたが故に売薬業者の製造の右の過程はすべて富山市東部の清水町の煉場で集中して行うようにその生産場所を規制した。

売薬業経営の技術的内容をなす二つの支柱即ち原料薬の品質確保並びに製造技術面の中枢部をなす原料薬の調合吟味——は、売薬業の経営の特長である配置売薬制度という顧客の信用獲得を目標にする経営をその上に支えるための重要な基盤である。この営業的基礎は藩権力によつてこのように強力に統制されこの封建規制のしめつけている構造の諸関係上に行商が成立していた。即ち行商地域を確保する富山売薬行商人はこのように品質的規制のために、一つの腕は原料薬の統制において、他の腕は原料薬の基本的調合の場の統制において緊縛された。しかし後段では自ら露見しているようにその薬種炒種の規制は守られ難いものであり、数年後の天保十二年富山町奉行よりの

達に「近年唐物和物出口不正之藥品取扱……鹿藥調合」するを戒め弘化元年富山藩御産物方よりの御産物方よりの御触にも「向後改精試藥品吟味專要之事に候、他所より似寄之売藥數多相弘候由、依而以後包紙に目印を附相捌可申候事」とされた。売藥の生産は原料の配給と共に始めから専売、藩営ではなく、民營であつたといえ、幕末とくに天保期頃より封建権力と規制とによつて一層しめつけていた。

- 1、史料集 六五頁 この外に天保三年の富山町奉行よりの当番町年寄宛の達にも同一趣旨の規定がある。同 一八五頁参照
- 2、史料集 一九六―七頁
- 3、" 二〇二頁
- 4、" 二〇四頁

第四節 人的取締

イ、売藥業者の取締

(一) 売藥行商の経営は仲間互助の精神においてなさるべきことが原則であつたことは他の産業の場合と同様である。しかし前記のように富山藩第一の国産としてこの營業者は藩権力によつて嚴重に規制された。その人的取締の規準は文政二年の富山町奉行の反魂丹上縮への達に次の如く示されている。¹⁾
 惣而同商売人、一統ニ仲間之事に候得ば随分成立候様互ニ助合可申所、人我意を以他を妨け申様成艱ニ相成候、是等之義は甚不心得之至り候、惣而縮方之儀は一ニ定法を申渡し置、其上組ニ仲間示談之縮方相定有之義ニ而、相肝候ものは其定法を以申合相候可申

²⁾ この遵守すべき仲間の規範については弘化元年の富山藩御産物方からの達に売藥人諸組について

一、諸組一統順番連名帳可指出事

但し新に順番指加候節、一統示談之上人選書可出候事。

一、組々当番印鑑帳二月十五日迄に可指出候事

但 年に相当り候もの二月十三日迄名書可指出候事……」
 と決められた。

植村・富山藩の売藥統制

(二) また旅先における心得、手代小者等の身元調査が規定され、同じく反魂人商売人家来の旅先諸心得、並に手代、小者召抱心得に關し……組商売人共調査役人方江相向、召抱置候手代、小者町所、名前且請人名前等可申出候、尤以来毎春置替相済次第、各之通可申届候」とせられた。この旅先心得は諸組の仲間示談において規定したものと内容においてほぼ同一であつて反魂丹商売人共への達には「賭之勝負或悪敷参会等、無故他処に居留り申者……場所持之分は商売取上げ 家来の分は重き手当可申付候。……金銀等引明ケ致出奔候者は、場所持之分親類又は組合、家来共は親、兄弟、請人等江申付、幾重にも為尋出……」と規制した。

(三) また同じ趣旨を補足した取締は、旅先諸心得違反者処罰のこと、行商出立日限厳守のこと、連人に対する諸心得等が示された。例えば天保元年反魂丹役所より反魂丹商人への達に³⁾

一、主從遊処江罷越、過分金銀相費、其所より直様欠落或は其儘令帰着候者等有之躰相聞へ候、已來場所先にて金銀遣ひ捨、家事をも不顧放吟令増長候者は、場所取揚、急度可申付候、連人請人より弁金為致可申候、其上向後旅出差止咎申付候、
 一、新に連人召抱者は、先主へ篤と聞合之上差障無之者は召連可申、不取調理に而召仕候者は急度越度可申付候、
 一、連人出情相動候者は、随分憐愍を加へ引立可申事、
 一、旅出商売人共心得違之儀に付色、申分有之、仲間共出立日限も自ら差遅れ場所方手余り候者は増人助等指入候義、作法に相洩難相済候、已來手早に可令出立候、
 一、都て仲間共及争訴出候節、利害を以相論し候上色、申掠候者於有之者、改方江引渡急度可及吟味に候、
 右之条、売藥人共江急度申渡候条、請印取受可指出候、且是迄召仕候連人、名書を以年、行司迄可申届置候、右等之趣急度相心得一統嚴重可相守者也

寅 正月

反魂丹役所

(四) 同様にして旅先行商に出立しないものについても吟味された。行商地域を等しくする者は相共に一定期日に行商に出掛けることになっているのにも拘らず、理由なく出立しない場合である。例えば安政四年布目屋三右衛門仕法について開物方役人は聞⁵して「……十一月十一日開物方御役所より当番三人御呼出之上、三右衛門今以出立不致、且又売買の様子も相聞江申由如何之義に候哉、三右衛門呼立委細聞⁶之上、後役所十三日迄可申出候与被仰渡候事……」と吟味をうけた。勿論各行商地域に向う仲間組合においてもこれは組内規範としての仲間示談に規定された問題であり、それは町役所から認可されたものであつた。例えば安政五年越後組では仲間示談の認可を申請しそれによつて施行したものであつたから示談書で規定自身に公的権力によつて統制取締をうけるものであつた。

その他売薬業者の旅先不心得の者の処置については「不心得者名前封じ札にて富山町吟味所に差出すべし」とされて、その身元調査がなされ、取扱品の吟味、帳面の確認などが屢々行われた。

(四) 富山の外、富山藩の領域に入るが仲間組に属しない土地の薬種屋についても藩権力によつて取締られ、既に早く元文五年富山御儉約奉行より富山及びその附近の八尾、西岩瀬、四方の反魂丹売買の者についての達しには、⁹当町・八尾・西岩瀬・四方反魂丹売買のもの、一町ニ相調理、名書・印形を取、帳面各奥書にて可被差出候、且薬種屋共売子明細書可被為指出し候、

一、他所より薬種求来反魂商丹売之ものは、薬種屋にて相知間敷候間、随分反魂丹売買之もの洩無候様可被及詮義候、已上

十一月 六日

御儉約奉行

池上四郎兵衛 殿
不破寛右衛門 殿

右の調理は司法的、行政的取締のためでなく、人員を確めることによつて上納金の収入を確実化することも一方で目標にされた。弘化元年反魂丹方町役所より名前、連人、諸組等の調理が行われたのはこの例であつて古名前千

百七拾三、古連人は八百九拾五について上納金が記された。

口、連人その他の取締

売薬業経営者たる行商人のみでなく、これに雇傭される連人、助人等についても同様な藩権力の取締制限が規定されていた。

(一) 連人の召抱には、例えば富山町肝煎より諸組当番年行司宛¹¹の達にて暇遣し候分も、右之者同商売人仲間之中江召抱候はば、其組は勿論他組

たり共、先主人が指構ひ無之趣印形之送り書付取受召抱可申候、尤毎春連人縮入源五郎方にて諸組一統連人共印形取請候節、主人勢致し候分は右送り書付見届候様被仰渡候、尤右之通致て被仰渡候上万一先主人送り無之者を召抱彼是申分之品有之節、御調理之上相知候得は急度越度に被仰付、以来仲間一統に奉行御差留可被仰付候、右之通入念に申渡し候之様被仰渡候事、以上

寛政十一未三月

諸組当番 年行司衆中

町 肝 煎

これは恰も定住商人の奉公人に対する取締の場合と同様な規定である。解雇された者は原則として仲間内に雇入れられず、もしこれを雇入れるには、借金があれば返済するを要し前雇主の承諾を必要としたことは前雇主の権利と利益を擁護せんとするのに外ならない。¹²即ちその独得の営業上の技術や知識、取引の仕方を修得して、他の雇主に知られると少なからぬ不利を受けるのみでなくもし新雇主に雇れて或いは独自でも同じ行商地域に行商する場合があれば、従来の馴染関係によつて得意先が彼によつて奪われる危険が大であるからである。このようにして前雇主の権限を守り、不正行為を排除せんとし、業者間のわだかまりを生ぜしめないようにした。

(二) 雇入れられた連人の勤務が、忠勤群を抜き模範となるべきものには雇主において賞品を与えることが行われた。天保元年反魂丹役所より反魂丹商売人共への達には「一、連人出精相勤候者は随分憐愍を加へ引立可申事」とあるのは注意される。反対に罰としては謹慎、解雇を命ずるものであつた

が、一度解雇されたものは次の雇傭には制限があり、前雇主の承諾を得るを要することとされていた。これは上記の理由とともに「仕来り」「旧慣」を尊重しながら勸善懲惡を主旨として伝統主義に立つ道徳律への犯則を糾弾せんとする氣質の表現でもあると考えられる。旅先において連人のうち諸事不埒なる者については仲間組の示談書にある通りであり、例えば寛政十二年の奥中国組のそれにも次のように述べている。

一、旅先において連人之内諸事不埒成者、仲間内にて致見聞候付其他之親方共より右連人江及教訓に候之節、其連人より申聞候は自分に不埒有之候得は自分は自分之親方より預示に候、其元は其元之連人を可被相示与、我儘成不筋之者有之由相聞候、元来ケ様之我儘者は連人斗にても無之、其主人にも心得違有之候、主人と隔て得意廻り之連人抔江兼て申付之不行届として不埒も致出来候、右之通隔テ候て為相廻候連人に候得は、第一に右我儘を不相働、不埒之事可不仕出候様、主人より急度申付、尤右不埒成儀有之候得は、れ之連人にて相互に仲間中より可及教訓差当に候、猶又得意先におゐて不依何に故障之儀有之節は、自分一存を以不取斗、其処に居合候仲間親方分之者江及示談、其故障輕重共に示談之上取斗候様、右之品、堅相守候様、人々相互に急度申付為致廻在候は、右駄之我儘は申聞間敷、又不埒も相成間敷候、然は何れ之親方より及教訓候ても、兎略には難請急度可相慎事に候、左候得は自然より不埒も難出来相止可申候、併右之趣相用不申者は誠不人に候得は、自分連人右之不筋を見習候様に熊行候ては、仲間一統之妨に相成候之間、早速旅出差留可申候事、

かくて連人の心得違に關して、違反行為謝罪のための仕末書はがその連人の仲人が保証人になつて組の向寄宛に提出せしめられた。

(三) 文政二年又は天保二年買付連人についての反魂丹方役所よりの達しに「是迄買付連人之儀、於諸組名前主相頼買付貰い來候へとも、品に寄右名前主得勝手を以場所売払候始末も有之……右連人引取候様名前主より断を申聞候……右に付此度評議之上買付名前代申渡候。」

植村・富山藩の売薬統制

として買付連人の取扱ひ方を規定し、連人の名も明らかに届けださせることにされた。これによつて「売人より銀六匁五分宛」が上納させられることになつた。¹⁸しかしこのことは語方である行商人の側において同書の追達に「右ニ而は連人之名前相頼れ、印形相用ひ候故、畢竟名前之威相勢衰迷惑之族有之候段粗相聞、尤之筋に被察候」とあるのは止むを得ないことであつた。語方の下に奉行する徒弟的な性格をもつ連人の名前が明らかにされることは封建的意識の行商人には蓋し好ましからざるものと見られたのも無理からぬことであつた。が更にはこの連人も課税の対象とつり、しかもその率は既述の如く次第に名前のそれに近接せんとする傾向にあり、上納金の漸増を恐れての心理が働いたものとも考えられる。

(四) なお連人、助人など売薬商人に雇われる者のなかには富山近在の農村出身者が少くなかつた。農閑余業の乏しい北陸の米の単作地帯が商品経済にさらされたときに貧農は苛酷な条件に対しても労働力を放出することになつた。「売子に召仕候者近年不埒之働きいたし、其主人に過分の損銀を相懸申候に付、自今以後當人一門等請縮は勿論弁銀指出候而も指問不申者請人に相立、其村方肝煎中之奥書を取請印章、為入念村役人中に可致尋及候事」とされ、売子になつた村の者の行動について述べている。また安政五年滑川売薬縮方よりの売薬諸心得にも「當御郡之者共之内、魚津町等他之支配へ売薬売子に……」とある。これと共にそのなかに武士の身分の者も雇われた。幕末期の武士階級の窮乏、社会的・階級的身分の困乱は衆知の如く深刻化し、農村の子弟とともに、窮迫した武士も売薬商人に雇傭された。文政二年富山町奉行より反魂丹上納への達しに

……召抱候家來共之内輕き御家人之扮、又は他御領もの抔召抱候者も有之躰相聞候。帶刀之義御縮方相障り申義に付、此度詮議之上調理役人方江相向、召抱置候手代、小者町所、名前且請人名前等可申出候。と吟味方が申し渡された。

ハ、人員の統制

定着商人においては業者の数は仲間によつて一定数に限定せられていたよ

うに、富山売薬行商人の場合においても行商先の地方別の組によつて脚数が定められていた。しかし得意先は行商人の営業活動によつて夫々決定確立されているものであり、地方々々の交通路、商業圏に則りながら行商圏が形成されていくので、各個人により行商圏が拡大し時々縮小すると共に得意先の分布の密度により組内の行商圏に各人別の濃粗が現われ、従つて組においても行商圏自体にその関係が総合的に現われる。かくて同一組内においても時間的に、地域的に行商圏の移動、濃粗によつて、組内の脚数は変動を生ずることになる。このような行商圏の構造における脚数の移動は定着の店舗商人の場合における業態の発展、衰微によつて発生する変動に比較して移動的外延的要素が加わるだけそれだけ一層激しいものになる。この脚数の移動は反魂丹役所の所管事項であり、組を通じて許可をうけねばならなかつた。それは組内のその行商圏について為された。次の例は九州組内で六人の各行商先についての新名前の許可願であつて、この事情を物語るものである。²⁴

口上書を以奉願候

従来私共義売薬場所所持仕居候処、近年懸場追、相増甚手余り候に付、兼て増定御願申上度存念に御座候之処、此度被 仰渡之御趣意も御座候に付、尚更箱先並向寄江申出候所、熟談之上指障り之義も無御座納得済に相成申候、依て別紙之通夫々に江新名前御下ヶ方被為仰付被下候様仕度奉願上候、右之趣御賢察被為成下、願之通被為仰付被下候は、精誠手広商業相助増、繁榮仕難有可奉存候、此段何分宜被仰上被下度奉願候、以上

寅 四月

筑後久留米行

石動屋半兵衛

肥前平戸行

河口屋常太郎

豊後杵築行

室屋初太郎

豊後佐伯行

右之通向寄等納得仕候処相違無御座候間、何卒御聞濟被為仰付被下候様仕度奉存候依て奥印仕申候、以上

肥前唐津行 松井屋平次郎
御福屋岩次郎
同所行 井本屋榮次郎

九州組年行司 兵四郎
同 伊兵衛

反魂丹肝煎 治郎右衛門 殿
同 文次郎 殿

覚

一、豊後杵築行、新名前老面、室屋初太郎
一、豊後佐伯行、新名前老面、松井屋平次郎
一、筑後久留米行、新名前式面、石動屋半兵衛
一、肥前平戸行、新名前老面、河口屋常太郎
一、肥前唐津行、新名前老面、御福屋岩次郎
一、同所行、新名前老面、井本屋榮次郎

右之通御座候 以上

寅 四月

また助人の増加にも同じくその許可を富山藩に願ひ出ることになつてゐた。例えば蝦夷地での助人六名の増加を安政五年富山の売薬人五名が富山町肝煎に願ひ出て許可された事情は次の通りである。²⁵

是迄仲間五人連人共都合八人罷越、廻り方日数等相定り居候得は、遠ク蝦夷地江罷越候日柄も無御座、併此儘に仕置候ては旧来之得意等追、引越候もの不残江州等売薬人之得意に相成候時は、私共商売漸々衰微之場に至り如何可仕哉より不容易心痛至極罷在申候、依之是迄蝦夷地居住之得意并昨

年以來引越之得意先調理方旁土地柄等万事見聞之ため、東西蝦夷地江助人六人指遣シ申度奉存候、此段宜御聞濟被為成下候様仕度奉願上候、なおこれら雇人の増加は旅先の雇人を備い入れることによつて達成せしめることは禁ぜられていた。これは「御名産之秘事口伝を他国者に被知候事、以之外之心得違に在之候」²⁶ためであつた。

- | | | | |
|-------|----------|--------------------------|--------|
| 1、史料集 | 一五七頁 | 10、 | 一〇七頁 |
| 2、 | 二〇四頁 | 11、 | 一六七頁 |
| 3、 | 二〇五頁 | 12、宮本又次博士、近世日本問屋制の研究 | 三六〇頁 |
| 3、 | 一五九 | 13、史料集 | 一八一頁 |
| 4、 | 一六〇頁 | 14、宮本博士 前掲書 | 三五九頁 |
| 5、 | 一七九—一八一頁 | 15、史料集 | 一二二頁 |
| 6、 | 二六五頁 | 16、次のような一札を入れることとされた。史料集 | 二一〇—一頁 |
| 7、 | 二六七—七一頁 | | |
| 8、 | 一二三頁 | | |
| 9、 | 五七—八頁 | | |

入置申一札之事

一、私連人清八義於阿嘉表心得違之義有之、今度御察当之条々全清八越、一句之中被方無之迷惑之至ニ御座候、就右速ニ指除可申答之処、挨拶人等を以段々より詫申入候に付、先ッ預御聞濟忝致安心候、是已後当人へ急度慎方相示之趣粗左ニ相記申候、

一、彼表御規提事為相守可申候

一、同所香具売業人等より張込を受候義其外不依何懸り合ケ間敷義為致間敷候
一、右清八義万一病氣等相滞候共、彼地之もの一日たり共相雇候義為致間敷候
右之外仲間示談定法ニ洩候義ハ勿論、彼地ニおいて聊心得違之義も御座候ハ、御勝手御指留可被成候、其節違乱申間敷、為後日之仍而如件

弘化五年申年 正月

米屋亀吉郎

阿州御当番衆中

同 御順番衆中

前頭亀吉郎より申上候通り、清八義心得違在之候ニ付、私共兩人御詫申上候処
植村・富山藩の売業統制

下濟被成下千万難有奉存候、万一不法之義之候ハ、私共引受示談定法相立候様相誘、御組内へ御難題相懸申間敷候、仍而奥印仕候、以上

仲人

山室屋文右衛門

同

押川屋平左衛門

- | | | | |
|--------|-------|--------------|--------|
| 17、史料集 | 一五三頁 | 22、(富山県)滑川町誌 | 一五三頁 |
| 18、 | 一五六頁 | 23、史料集 | 一五九頁 |
| 19、 | 一五五頁 | 24、 | 三二〇—二頁 |
| 20、 | 三三七頁 | 25、 | 一六六頁 |
| 21、 | 一九九五頁 | 26、 | 一一七頁 |